

わたし
No. 164
田中 伸
つぐみ
つぐみ

子どもたちの幸せを願って

小西 良博さん（志手原小学校 PTA）

◆私が教えられた部落差別◆

私は、農家の長男として生まれ、弟と両親の4人家族で育ちました。部落差別のことは知っていません。近々で暮らす祖父が久しぶりに実家に戻って来たときのこと、ひそひそ話として差別を受けている部落のことを知りました。その話を聞いたときは、違和感がありました。気にすることもなくすっかり忘れていました。

小学生時代には、学校で「道徳」の時間はありましたが、今のよう

な人権に関する内容ではなかったように思います。しかし、中学生になり歴史の時間に身分制度に関する授業がありました。今では解釈が変わっていますが、その当時は、いわゆる「土農工商」の他に、さらに低い身分（※2）があるという授業を受け、部落差別のことが知ったのです。クラスの友人もその存在は知っていましたが、どうしてそのような不合理な制度が必要なのか分からない様子でした。

その後、同和問題について学校内で話しをする機会もなく、このような中途半端な知識で差別を受けている部落の存在だけを知ることになってしまいました。

※2 今の教科書では、「さらに低い身分」という考え方はなく、武士の支配の中「武士・百姓・町人など」の社会から排除された「外」の人として存在させられたと考えられている。

◆差別の現実を知る◆

私が部落差別の現実を直面したのは、三田市で初めての糾弾会が行われたときでした。何のいわれもない理由で疎外され、しいたげられた日々を余儀なくされた人々の悲痛な叫びに、私自身も言葉では言い表せないもどかしさを感じました。その頃より、企業や地域内でも同和研修がよく開催されるようになり、私も職場内や地域の研修会に積極的に参加しました。しかし最初の頃、研修会では、意見がなかなか出ず、いたずらに時間が過ぎ、司会者や助言者の話を

聞いて終わることもありました。また、高齢者を含めた研修会では、いわゆる「寝た子を起すな論」をとる人もいました。私は研修会に参加し、正しく理解しようとしていました。

その後、一人一人が参加しやすい内容に研修会が工夫され、人として平等に生きるための権利をみんなが考えるようになっていきました。

◆自分と向きあおう◆

私が研修会に参加するときに、いつも頭の片隅にしている言葉があります。それは、ある研修会で聞いた「踏まれた足は痛い、踏んだ人は何の痛みも感じない」という言葉です。例えば、ある人が差別的な発言をしても、言った本人は、そのことに気がつきません。しかし、言われた人にとっては、大変な心の痛みを感じるということがあります。差別とはそういうものだというのです。

その言葉を聞いてからは、研修会に参加したときだけでなく、いつも自分と向き合い、人の気持ちを大切に考えるように努めました。

◆子どもたちのために◆

差別は、人が人より有利な立場に立ちたいという願望をかなえるために、自分より弱い立場の人を作り出すことで、優位に生きられるという考え方だと思います。そのような考え方は、今の社会にも根強く残っています。

私は今、PTA会長として子どもたちの幸せを願って活動しています。今後も人の気持ちを守られる社会をめざして生きていきたいと思えます。

NO. 480

人権さんだ

人権さんは、みなさんに人権に関する気づきや情報などをお届けします。新たな発見や共感したことなどを含めてご意見、ご感想を人権推進課までお寄せください。
問い合わせ＝市民生活部市民文化室人権推進課
(559-5148 FAX 563-7776 e メールアドレス jinken_u@city.sanda.lg.jp)